

2011 年夏休み友情のレポーター ヨルダン取材レポート

香村 巴月（香川県／当時 11 歳）

国境なき子どもたちが運営するジャバルアンマンのユースセンターで、7月21日に、8人のみんなと出会った。男の子は4人で、スーダン人のルアイ(14 歳)とエジプト人のアシュラフ(15 歳)、ヨルダン人のイスラム(17 歳)、ユセーフ(19 歳)。女の子も4人で、ヨルダン人のシュルーク(16 歳)とハニーン(14 歳)、ヨルダンとイラク人のハーフの姉妹ロナーク(15 歳)、ロジーナ(14 歳)。

私にとってはみんな年上で、自己しょう会をした時は、もうガチガチにきんちょうした。通訳してくれる人はいるけれど、言葉はそのまま通じない。ちょっと不安になった。でも、その後みんなと街を歩くと、その気持ちは変わっていった。上でしょう会したロナークが手をつないでくれた。しかも、まぶしいくらいの笑顔で。シュルークとロジーナはかたをだいてくれたし、ハニーンとも手をつないだ。すごくうれしかった。日本だったらよっぽどの友だちでないとそんなことはしない。それから、どんどんきんちょうがほぐれてきた。みんな明るくて国のちがいを感じさせなかった。1人で固まっていた自分はずかしく思った。

その日おぼえたアラビア語

I love you. → アナ アハップキ

I love you, too. → アナ ハブック アイダム

次の日は、男の子たちとカラクと死海へ行った。カラクへむかうバスの中では、それぞれの国のお金（通貨のちがい）の話でもり上がった。コミュニケーションは、簡単な英語と会話帳で取ることができた。持ってきた日本円をもう一人の友情のレポーターの大智くんが取り出してみせると、みんなもうれしそうにヨルダンのお金を取り出し、お金の交流会が始まった。ヨルダンには、「ディナール」「フィルス」という単位があったて、1ディナールは1000フィルスだそうだ。はやく覚えたい。カラクは、中はすずしく外は暑かった。光の入れ方を工夫していたところが心に残った。

その日おぼえたアラビア語

どうぞ → ファッダリ

こんにちは → アッサラーム アレイクム

死海に行って、ういてみた。あおむけにもなれるし、うつぶせにもうける。すごく楽しい。足だけどろパックをした。とても気持ちが良かった。

帰りにラクダにのった。ラクダが立つとき、しゃがむときに、とてもこわくてキャーキャーいった。スタッフの人といっしょにのった。ラクダの目はきれいな灰色でぬれているみたいだった。その目には、すごい長い(3~5cmぐらい)まつげがついていた。カラクと死海では、ビデオをとった。

23日は、女の子たちといっしょに、アジュールンとウナム・カイスへいった。そこでもビデオをとった。予定では、ペトラ遺跡に行くはずだったが、前日の死海が42℃とかなり暑かったので北のほうにあるアジュールンとウナム・カイスに行くことに決まった。

アジュールンに行くバスの中では、歌でもり上がった。アラビア語の歌(トマトを食べたらトマトみたいに顔が赤くなっちゃった、という内容らしい)を教えてもらったり、日本の歌「ぶんぶんぶん」を教えてあげたりした。みんな「ぶんぶんぶん はちがとぶ」のフレーズを覚えてくれた。なんだかうれしい。アジュールンに着くと、前日のカラクとは大違いでとてもすずしかった。建物にはアーチがたが多く、鉄砲をうつまどがあったりと、長い歴史を感じた。

ウナム・カイスでは、とても風が強く、ロジーナのアラブパン(昼食)が飛ばされてしまうなどのアクシデントがあったけれど、それでも楽しかった。ウナム・カイスにはいろいろな通路があってワクワクした。遺跡についてどう思うのかのインタビューもお互いにしあった。

24日。いよいよ取材になる。まずはイメージを膨らませるために、絵コンテを書いた。大智くんがウナム・カイスで頭をぶつけたこと、バスでアラビア語、日本語を教えあったこと…。いろいろな意見が出たけれど、1番うれしかったのは全部友情のレポーターに関係する場面だったこと。

そうしているうちに見えてきたテーマは、『国籍』。アンマンが見わたせる近くの公園でインタビューを始めた。国籍の違う友だちはいるか。もっとそんな友だちをつくりたいか。それはどうしてか。そんなインタビューをしあって、1番心に残ったのは、みんな1つ1つの質問に、じっくり考えて答えてくれたことだった。表面だけの考えではないことが1番うれしかった。私だったら、あまり考えずに答えてしまうことも、みんなは1つ1つていねいに答えてくれた。

最後に、1人ずつビデオの前で国籍を言って終わった。スタッフの人も言った。その単純な作業が、何だかとっても素晴らしく思えた。なぜかというと、いろいろな国籍の人がいるにもかかわらず、私たちは友だちだったから。

ヨルダンに来て5日目のこの日、遠足にも一緒に行ったイラク人とヨルダン人のハーフの姉妹、ロナークとロジーナの家を訪問して、取材をさせていただいた。

イラクにいたロナークとロジーナは、ヨルダンにいたお父さんに呼ばれて、お父さん、お母さんと一緒にくらすことにした。しかし、お父さんは家を出て行ってしまった。イラクに帰ろうと思っても、お父さんがロナークとロジーナのどちらかをおいていけ、というので帰ることができないそうだ。また、イラクの人はヨルダンで働くことができないので、どんどん家計は苦しくなっていく。けれども、友だちが来てははずかしくないように、家だけはきれいにしているそうだ。

1番印象に残ったのは、ロナークとロジーナ、2人のお母さんがなみだぐんでいたことだ。ロナークとロジーナは、ヨルダンに来て良かったことはほとんどなかったと言う。それを聞いた時、わたしはとても悲しくなった。そんな思いをしていたなんて…と思ったからだ。元気な2人と、悲しい背景。その2つが、どうしても結びつかなかった。

その後、スーダンにいたことのあるキファさんのお家で取材させていただいた。

「キファさんは、家族は何人いますか。」

「子どもが8人います。」

質問をどんどん言っていく。でも、その内に、

「どうして貧しいと思うのですか。」

「この家で困ったことは何ですか。」

…失言だった。まるで、私が『あなたは貧しい。』『あなたの家はひどい』と言っているのと同じだということに、途中で気がついた。心に寄り添ったインタビューをしたと思っていたのに…。でもキファさんは、少し困った顔をして、「雨もりが大変」と、答えてくださった。

それからユースセンターにもどって日本の紹介をした。私のある1日を紹介すると、たくさんの質問とたくさんの拍手をもらった。

次の日は、イラクから逃げて来たというモハメドくんの家取材した。モハメド君の家は、だれも働いておらず、UNHCRから毎月250JD(約3万円)をもらっているが、その内120JD(約1万5000円)は家ちんに消え、残りのほとんどはお父さんの糖尿病の医療費に使われる。また、25JD(約3000円)は、借金の返済に使われる。そうすると、残るのはほんのわずかなお金だけだ。しかも、お母さんはストレスによる高血圧だ。

少しでもお金の足しにしようと、お母さんとお姉さんはビニールぶくろを編んでポーチを作り、3JD(約 360 円)で売っている。また、お兄さんは得意な絵を描いて売っている。けれども、ほとんど売れない、と話していた。とてもかわいいポーチと素晴らしい絵だった。

私はお兄さんが描いた絵の中の1枚にとってもひかれ、20JD(約 2400 円)で買った。お兄さんが想像して描いた、笑っていて、やさしそうで、かっこようなオオカミの絵は、とても神秘的だった。スタッフの人も絵を買ったし、大智くんはポーチを買った。

びっくり！ヨルダンのバースデーケーキ！

ヨルダンのバースデーケーキに、花火がのっていた！

その日は、ユースセンターの活動の様子（絵画、スポーツ、演劇、音楽、コンピュータ）を取材し、その後、ユースセンターで働いている女性スタッフのフルートさんを取材した。

フルートさんは、イラクから逃げてきた。

ヨルダンにいる間に、イラクにいた大事な人を、亡くしてしまった。

フルートさんは、子どもが大好きだ。どうしてユースセンターで働いているかという、自分と同じような境遇の、大好きな子どもを助けてあげたいからだという。

第三国定住(今、危険な状態にある母国から、別の国に逃げて難民となった人を、また別の国に受け入れるという制度で、UNHCR による)を申請してから、もう 12 年も待ち続けているフルートさんは、いつも笑顔でいる。

そして、日本について聞いてみるとこう答えたのだった。

「昔、日本はきれいだった。なぜならイラクにいる時、アメリカといっしょに自衛隊が入って来たから。でも今は、KnK の日本人スタッフと出会って、日本の人みんなが自衛隊みたいな人ではないとわかって好きになった。」

「こんな答えでごめんなさい。」と。

7日目のこの日は、今までに学んだことを発表するプレゼンテーションの日だった。私たちのプレゼンテーションの前に、演劇クラブの人が、『KnK ソング』を歌った。歌詞はアラビア語で、良くわからなかったけれど、最後に日本語で「ありがとうございます KnK！ありがとうございます KnK！」という歌詞が入っていて感動した。ここに来て、現地の人から日本語を聞くのはうれしかった。

次に、ビデオワークショップで作られた作品を鑑賞した。〈ダウンタウンへようこそ！〉という作品では、まちがいをけずられずに作っていてとてもおもしろかった。ビデオワークショップの表彰が終わった後、とうとう私たちの発表だった。初めてみんなと会って、とってもきんちょうしたことや、そのきんちょうがだんだんほぐれていったこと、遠足がとても楽しかったことや、取材に失敗してしまったことなどを思

い出しながら、これまでのことをしゃべった。最後に会場を見渡すと、本当にたくさんの人が来ていた。こんなにたくさんの方の前で発表することはできて良かった。

いよいよ最終日。

一緒に遠足に行ったユースセンターの8人に、ダウンタウンを案内してもらおう。ハニーンが、ビーズのプレスレットを買ってプレゼントしてくれた。びんの中に砂絵を作っているのを見たし、とってもかわいいチョコレートを売っている店も見た。でも、そうしているうちに時間がきて、とうとう空港へ行く時間になった。みんなも、空港に見送りに来てくれた。ロナークとハニーンは、泣き出してしまった。それを見ると、”泣かないぞ”と決めていたのに、私も涙が出てきてしまった。半泣きでみんなとだきあった。だから写真は1枚もない。みんなだき合っていたから。ロジーナとも、ロナークとも、ハニーンとも、シュルークとも、イスラムとも、アシュラフとも、スタッフの香子さんとも、みんなとだきあった。別れるのが悲しかった。次会えるのが、すぐではないとわかっていたから。でも、絶対またヨルダンに来ようと思った。また、みんなと会おうと思った。

私はヨルダンに来る前、ヨルダンが中東にあるからとっても危ないのだろうと思っていた。イラクやイスラエルがある中東はずっと争いが絶えないから。けれども行ってみると、危ないと思うことは1度もなかった。取材したイラクの人も『戦争している国の人』という感じは全くしなかった。ヨルダンはテレビで見る中東とは全然違っただし、取材したイラクの人は、とてもやさしかった。中東といえば怖い、爆弾、銃…というイメージが私の中にはあった。ヨルダンはにぎやかで、楽しい町だった。貧困やイラク難民などの問題はあるけれど、ヨルダンはいい国だった。「中東」とひとくくりになっているけれど、中東すべての国が危ないわけではないと思った。

このように、イメージだけで私たちはいろいろなことを決めつけてしまう。

それは、フルートさんの話でもわかる。

フルートさんは、自衛隊だけで、日本がきれいになっていた。だから、KnK と出会うまで、日本＝自衛隊というイメージだった。

わたしもそうだ。ヨルダンに行くまで、ヨルダン＝怖い国だと思っていた。

イメージで決めつけるのは、よくないとわかった。

決めつけないためにも、他の国に行って、他の国の人と仲良くなることは大切だと思った。

また、私はヨルダンに行く前「国、言葉、宗教のかべをなくして取材しよう！」と思っていた。そんなかべが、ぶあつかいがあるかべがあると思っていました。

けれども実際行ってみると、現地の人々にかべなんてなかった。みんな明るくて、

やさしくて、会ったしゅん間から友だち…親友みたいだった。
かべを作っていたのは、私だった。本当はかべなんてない。国境なんてない。
私たちは、本物の本当の意味での「国境なき子どもたち」だった。
難民問題や貧困を取材しに行ったヨルダンで、私はとても大切なことに気付いた。

今また、ソマリアで大飢饉が起きたために、難民が「ケニア」「ジブチ」「エチオピア」
になだれこんでいます。しかしその国も干ばつによる飢餓は起こっていました。そこ
にソマリアの人がなだれこんで来たため、干ばつによる飢餓は、東アフリカ全体で深
くくさを増しています。

東日本大震災の時のように、世界の国々から、一刻もはやく援助の手がさしのべられ
ますように。

そして今飢餓の危機にひんしている子どもたちが、1人でも多く、助かりますように。

2011年 夏休み友情のレポーター 香村 巴月

2011 年夏休み友情のレポーター ヨルダン取材レポート

石井 大智（広島県／当時 14 歳）

ヨルダンで何をしたのか

ヨルダンは、シリア、イラク、イスラエル、パレスチナと非常に不安定な国に囲まれている。そのため、多くの難民がヨルダンへやってくる。しかし、その難民にヨルダンで労働する権利は与えられていない。さらについ最近まで、難民の子どもたちには教育を受ける権利も保証されていなかった。

ぼくの仕事は、このヨルダンの状況を日本の同世代の人に伝えることである。自分の目で見て、耳で聞いて、そのありのままの状況を伝えることだ。

具体的には、KnK が運営するユースセンターに通ってきている男女 4 人ずつとともにビデオを撮影するというをした。

ユースセンターというのは、ヨルダンの首都アンマンの中心部にある。ユースセンターでは、青少年の表現力やコミュニケーションの力を向上させようと、情操教育が行われているようだ。演劇や英会話、民族楽器などといったクラスを 10 ほど開設している。どうしてこのような活動をしているかときくと、ヨルダンの公立学校では情操教育がきちんと行われていないようだ。だからこそ、そのようなプログラムが必要なようだ。

ユースセンターの場所は、ヨルダンの政府の教育組織の青年高等評議会（HCY：Higher Council for Youth の略）というところにかしてもらっている。ちなみに、これは KnK がヨルダンの支援から撤退した時に、ひきついでやってもらったためであるようだ。

今回ともに活動した 8 人はユースセンターのクラスの 1 つである「ビデオワークショップ」というビデオ作品を作るクラスに所属しているぼくと同じぐらいの年の人である。ユースセンターには家庭に様々な事情を抱えた人もいる。今回ともに活動した 8 人も国籍が違ったり、家庭環境も違う。そのことをまず知ってもらいたい。

ヨルダンの場所

ヨルダンと日本は約 9000km 離れている。

中等と呼ばれる地域にあり、アフリカ大陸も目の前。

日本からヨルダンへの直行便はなく、今回はドバイ経由で行った。

ヨルダンの周辺

シリア、イラク、イスラエル、パレスチナ…誰もが「危ない国」というイメージを持

つ国にヨルダンは囲まれている。ヨルダンはそれらの国の中でも比較的安定しているので、周辺国から多くの人々が避難してくる。そのため「難民」が多く、KnK のユースセンターにはなんと9つの国出身の人がいる。

共に時間を過ごしたユースセンターの8人

- ・ イスラム ヨルダン人 17歳
 - とても明るく元気。死海で泳げないぼくをむりやりプールに連れて行こうとするぐらい元気な人。ヨルダンの幹線道路で、ぼくのためにどうにかタクシーをつかまえようとしてくれたのも印象的。
- ・ ユーセフ ヨルダン人 19歳
 - 会話できるほどではないが、日本語をよく知っていた。さらには、これは何と言うのときかれたこともあった。男子4人の中では19歳と、一番年上。リーダーのような存在で、KnKのスタッフの清水さんのビデオカメラのアシスタントもしていた。
- ・ アシュラフ エジプト人 15歳
 - カラク遺跡の撮影では、一緒にペアを組んだ。その時は、優しくぼくに撮影の仕方、テクニックを教えてくれた。いつも笑顔をみせてくれるので、ぼくを明るい気持ちにしてくれた。
- ・ ルアイ スーダン人 14歳
 - ルアイは、ちょくちょく横腹をつついてちょっかいを出してくる、少しお茶目な人。24日には互いにインタビューをした。インタビューによると、ルアイはエジプトにも住んでいたことがあるそうだ。
- ・ ロナーク ヨルダン・イラク人のハーフ 15歳
 - ロジーナの姉。23日のアジュルンという遺跡では、撮影のペアを組んだ。ふだんは明るく、話しやすい気さくな人だ。しかし、25日に家庭訪問をしてインタビューをした時には泣いていた。
- ・ ロジーナ ヨルダン・イラク人のハーフ 14歳
 - ロナークの妹。23日にアジュルンという遺跡にむかうバス車内では、多くのアラビア語の歌をロナークとともに歌ってくれた。とてもきれいな声だった。
- ・ シュルーク ヨルダン人 16歳
 - 4人の中で一番年上であるせいか、少し大人。手にバンドのようなものをつけるのが好きなようでぼくにもいくつかくれた。踊るのが好きなようで、23日のバス車内でも踊ってくれた。
- ・ ハニーン ヨルダン人 14歳
 - カメラで写真を撮るのが好きで、23日の遠足のバス車内ではいろいろな構図で写真を一緒に楽しんだ（例えば、ピンタをされている瞬間など…）アラビア語もハニーンから少し教わった。

ヨルダンでの日程

7月20日～7月29日

時刻はそれぞれ現地時間。日本とヨルダンの時差は-6時間。

7月20日～21日

18:00 > 22:20 羽田 → 関西国際空港 (EK6250)

23:35 > 05:05 (翌日) 関空 → ドバイ国際空港 (EK317)

07:25 > 09:20 ドバイ → アンマンクィーンアリア国際空港

EK: エミレーツ航空

7月21日

この日はユースセンターの8人とはじめて会った日。まずはユースセンターでお互いの自己紹介をし合った。みんな明るく、すぐに打ち解けることができた。その後、近くの公園でどんなビデオが作りたいか話し合った。

アラビア語をメモした手帳を見ながら、どうにかコミュニケーションをとろうとした。公園で話し合った後、近くのカフェで飲み物を飲んだ。ユースフがいろんなアラビア語の単語を教えてくれた。

7月22日 男子4人と死海へ

8時にホテル前にみんなで集合。バスにゆられることおよそ2時間。アンマンの南140kmにあるカラク遺跡に到着。2人1組となりビデオの撮影を行う。自分はアシュラフとペア。その後、死海に行って遊ぶ。気温は41℃、水温は30℃。とにかく暑かった。

死海からアンマンへの帰り道のハイウェイわきでラクダに乗せてもらう。

7月23日 女子4人とアジュルンとウナム・カイスへ

行きのバスの中では、なぜか「ブンブンブンはちがとぶ」を歌うことに。とてもにぎやかなバスは、いつの間にかアンマンの北西76kmの位置にあるアジュルンという遺跡へ到着。二人一組となって、昨日と同様撮影を行う。

その後、シリアの国境近くウナム・カイスという遺跡に到着。ここでは昼食の後、明日からのインタビューの練習をした。

7月24日

午前中はホテルでKnKブログを書き、12時ごろにユースセンターへ。友レポ2人とユースセンターの8人の合わせて10人でビデオ制作について話し合う。下の写真のように絵コンテを書いてイメージをふくらませる。

徐々にテーマが決まっていき、最終的には「国籍」というのを、ユースセンターの外

のガーデンでお互いにインタビューし合う。

7月25日

9時30分にホテルを出発して、ダウンタウンを通過して、アンマンの中でも貧しい地域へ。この日はロジーナとロナークの家とキファさんの家でインタビューを行った。（インタビューは別紙にまとめてある。）その後ユースセンターの発表会を見せてもらう。友レポ2人は日本紹介を行った。

7月26日

イラク難民のモハメドさんの家でインタビューする。モハメドさんの兄、妹、両親から話をうかがった。その後、ユースセンターに帰り、みんなが持ってきてくれたヨルダンの家庭料理を食べる。昼食の後はユースセンターやKnKにユースセンターの建物を貸しているHCYについて取材。最後にKnKスタッフであり、イラク難民のフルートさんに話を聞いた。

7月27日

この日は、ビデオワークショップの発表会と友情のレポーターのプレゼンテーション。活動のしめくくりとなる大切な日だった。プレゼンテーションが終わった後、全員で写真撮影をした。その後、お世話になった方々に感謝の言葉を言って、ユースセンターから去った。アンマンで日本語教師をしているという方にも足を運んでもらった。

7月28日

ヨルダンで一番有名なモスク、アル・フセイン・モスクの前で10人で集合。最終日は10人で観光。ローマ劇場などを見て回り、ダウンタウンを探検した。昼食はアンマンで一番古いと言われるレストランで食べる。ヨルダンで印象に残ったことは多くあるが、一番はこの日の空港での別れのシーンかもしれない。女の子たちは泣いていた。

7月28日～29日

17:15 > 21:10 アンマンクィーンアリア国際空港からドバイ国際空港へ (EK904)

02:50 > 17:35 ドバイ国際空港から成田国際空港へ (EK318)

インタビュー取材のまとめ

25日～26日にわたり、私たちは実際にイラク難民の方などのお宅を訪問して、インタビュー取材を行いました。

25日 ロナークとロジーナの家での取材

ロナークとロジーナ姉妹は一緒に遠足に行った女の子。ロジーナは14歳、ロナークは15歳。父親はヨルダン人で母親はイラク人。もとは家族4人でイラクに住んでいたが、父親の希望でアンマンに引っ越してきた。しかし、その父親は新しい奥さんの所に行ってしまい、現在は母親との3人暮らし。父親がいないので、母親が働かざるをえないが、外国人がヨルダンで働くのは違法だ。

イラクに帰ろうとしても、親権の問題でかんたんには帰れないという。母親はイラクの人なので、ヨルダンにはたよれる親戚もいないので、孤独を感じることもあるという。

ふだんの明るい姿の二人からは想像もできない話だった。

25日 キファさんの家での取材

この家取材したのは、ユースセンターの女の子たちがビデオワークショップで、貧しさの中で生きるキファさんの家の女の子、カルメンさんを助けようとしたのがきっかけだ。その後カルメンさんはKnKのユースセンターに来ることとなった。

今回はカルメンさんはいなかったので、カルメンさんのお母さん、キファさんにインタビューすることとなった。

この家を最初に見たときの衝撃は忘れられない。窓もなく、床もコンクリートがみえている。明かりもなく、部屋は薄暗い。さらにお風呂もなく、小さな台所で体を洗っているようだ。

しかも、その中で10人がくらしている。8人のキファさんの子どもとキファさんのお母さんとともにだ。8人の子どもたちに父親はいない。生計もぎりぎり、医療費も自分の力で払えないという。

ここでは質問の答えよりも何を質問したかの方が印象に残っている。

自分の価値観をキファさんに知らず知らずのうちに押しつけていた。

26日 モハメドさんの家での取材

モハメドさんの家は6人家族。両親と兄、2人の妹とともにくらしている。イラクから身の危険を感じて逃げてきたようだ。イラクではお兄さんが恐喝されたこともあるそうで、毎日恐怖を感じていたようだ。

お兄さんはとても絵が上手。年上の方の妹はピアノが得意で、小さい方の妹はデザインをするのが得意なそうだが、その才能に見合った教育を受けることができないという。

UNHCRを通して、第三国定住の申請をすでにしているが1年ほど順番待ちをしているようだ。その待つ時間がストレスとなり、お母さんが病気になることもあるという。お父さんも糖尿病を患っているようだ。そのための医療費が高く、家計を圧迫しているようだ。

4人の子どもたちは、誰一人現在学校に通っていない。一つは学校の先生とうまくや
っていけないというのがあった。お母さんは子どもたちの将来が心配でたまらな
いそうだ。先が見えない生活に対しての不安が1つ1つの言葉から感じられた。

26日 モハメドさんの家での取材

フルートさんはイラク人で、戦争により危険を感じてイラクに逃げてきたそうだ。そ
して、ヨルダンでKnKスタッフになった。

イラクでは家族をなくしている。イラクには悲しい思い出があるので帰りたくない
と言っていた。

日本に対する印象もきいた。イラクに日本の自衛隊がやってくるのを見たときはショ
ックを受けたという。しかし日本の組織であるKnKで働くようになって、軍人では
ない日本人とふれ合う機会が増え、日本に対するイメージは変わったという。

「これ以上、自分と同じ思いをする子どもたちを増やしたくない」—その言葉がとて
も印象に残った。

この活動を通して感じたこと

キファさんという人から話を聞く機会があったので、そのことについて書きたい。

キファさんの家はアンマンの中でも貧しいジュファという地域にある。キファさんの
家はコンクリートむき出しで、明かりもなかった。床もコンクリートが丸出しで、ふ
とんがじかにその床にしかけていた。窓もガラスが入っていないという。しかし、こ
の家の中でキファさんとそのお母さん、キファさんの8人の子どもが生活しているの
だ。さらに8人の子どもにお父さんはいない。

あまりに衝撃的な光景だったのか、質問が思いつかなくなった。しかし、質問を続け
なければならなかった。どうにか質問しようと考えた。そして、「貧しいと感じるこ
とはありますか?」と言った。何とか質問をつなげた—ぼくはそう思ってほっとして
いた。

しかし、インタビューが終わった後に清水さんにこう言われた—「あなたは金持ちで
すか?—そう言われたらどう思う?」と。その後、彼はこう続けた。「金持ち」とか
「貧しい」というのは価値観の問題で、キファさんが自分自身のことを貧しいと思っ
ているかは分からない。しかし、ぼくは質問をしておきながら、キファさんのことを
貧しいと決めつけている。その「貧しい」というのは、豊かな国から見た価値観で
あるのだと。彼の言葉もまた衝撃的だった。

そこでぼくは気づいた。キファさんと同じ目線で、この家の状況を見られていなかつ
たことに。気づかないうちに、自分の価値観を押しつける質問をしていたのだ。キフ
アさんに近づこうとしていなかったのだ。自分はキファさんにきちんと向き合えてい
なかったのかもしれない。

そこでユースセンターの人たちを思い出した。彼らは国籍も、家族構成も異なる。当

然価値観も大きく異なるだろう。でも、お互いを理解し合っていた。さらに言葉の通じないぼくたちに対しても、きちんと向き合ってくれた。

一方で、自分と明らかに価値観が違うと感じるような言葉もきいた。ユースセンターの女の子の1人、ロナークに「国籍が違って互いを思いやることができると思いますか」という質問をした。そうすると、ロナークは「イスラム世界以外では、互いを思いやることができない」と言った。最初は驚いたが、これが彼女の価値観なのだ。この世界、いろんな価値観があると感じさせられた。しかし、ユースセンターの男子の一人、ユーセフは「壁は越えられる」とまるで確信したように言っていた。

なぜそのように言い切れるのだろうか。最初は不思議に思っていたが、共に活動していくうちにその答えは見えてきた。KnKのユースセンターでは全部で9つの国籍が存在する。しかし、そのような大きく自分とは異なる互いの境遇を理解し、向き合っていた。そういう経験が「壁は越えられる」と確信させたのかもしれない。

日本で伝えたいことはたくさんある。しかし、その中で特に多くの人に知ってもらいたいのは、「壁は越えられる」というユーセフの言葉かもしれない。

2011年 夏休み友情のレポーター 石井 大智